

REPUBLIC®

Ro™ by Jaime Hayón

ハイメ・アジョンによるロオ・チェア
— 新しいアイコンを作る

- + *Quiet Please* — なぜ今、いつそうの安らぎが求められるのか * 建築家ビャーケ・インゲルス of 都市のオアシス
- * *La vuelta de Hayón* — デザイナー、ハイメ・アジョンをバレンシアに訪ねる
- * *Me and my chair:* ジェイミー・オリヴァーのエッグチェア

PHOTO KlunderBie

REPUBLIC OF **Fritz Hansen®**

IT TAKES AN ORIGINAL TO MAKE AN ORIGINAL

THE SWAN™
designed by Arne Jacobsen
produced by Fritz Hansen



Now available in 11 new colours in the new Milani fabric. Be inspired at fritzhanzen.com/swan

REPUBLIC OF **Fritz Hansen**®

REPUBLIC®

CONTENTS



08

Quiet please!

なぜ私たちは静けさを
必要としているのか



31

We like

私たちが提案する、
今まさに輝くもの



32

The citizens of Heidelberg save their theatre

建築家が成し遂げた
歴史と現代の融合

34

Me and my chair - Jamie Oliver

おいしい食べ物と
すぐれたデザインの自然な関係

10

La vuelta de Hayón

バレンシアにデザイナー、
ハイメ・アジョンを訪問

14

The making of an easy chair

24ヶ月かけて、ここに。
ラウンジチェア「Ro™ (ロオ)」が生まれるまで

24

Urban oases

ビャーケ・インゲルスと彼のチームは
自分たちの町をより魅力的にするために働く

28

Aging with beauty

フリッツ・ハンセンの
家具工場を訪ねて

ME, MYSELF AND I

PHOTO Egon Gade

現代人に最も広く行き渡っている価値観は、本当に自己中心主義なのでしょうか？ 私たちはみんな「自分が…」 「自分を…」 「自分の…」 と考え、自分に酔っているのでしょうか？ そのような人もいるかもしれません。そして誰もが、そんなふうになってしまう時があります。

しかし、思慮深くあることと、自己満足に終始することは違います。深く思索し、内省する人は、一見したところ内向的で沈黙を好むように見えます。しかし静かな人は、沈黙する人とは異なり、オープンなのです。また静けさは、自己完結しません。ひとりひとりが深く考え、自分自身や未来について思索し、瞑想にふけるのは、文明社会において必要不可欠なことです。他人と有意義な繋がりを持つためには、自分を知っていなければなりません。あくまで、ひとりひとりが、です。

今もなお私たちの関心を引こうと一生懸命の“注目度至上主義”の経済社会においては、「思索し、自分に帰るための静けさが欲しい」という素直な思いは、当たり前というだけではありません。長い間強く求められてきたのです。「静けさ」を、デンマーク語で「Ro/ロオ」といいます。

だからこそ「Ro™」は、今という時代にふさわしい椅子です。デザイナーのハイメ・アジョンとともに、私たちは今年、この美しいラウンジチェアを完成させました。静かに瞑想し、自分自身でいられる貴重な時間と空間をもたらす一脚です。この椅子は「私をそっとしておいて」というメッセージ。あなたの無防備な背中を包み、横顔を外の世界から隠します。貴重な時間はあなただけのものであり、他人とは共有されません。そこで、あなたは、自分がいちばん考えたいことを考えられます。あなた自身になるのです。

ああ、これは家具にとって最高の役割ではないでしょうか。

ヤコブ・ホルム 社長兼CEO



[QUIET PLEASE]

TEXT Soren Nohr, Branding expert

静かにしよう。

かつては静寂が日常だった。せいぜい100年ほど前まで、人々の大半が住んでいた田舎は、静けさに包まれていた。耳障りな音などほとんど存在しなかった。しかし近代化が進むにつれて、人々は都会へと移り、互いの音が聞こえる距離へと近づいていった。私たちは、騒々しい社会を発展させてきた。スピーカー、自動車、電子機器、コンピューター、携帯電話、そして自分自身が音を出しつづける。ミーティング、セミナー、ブレインストーミング、円卓会議、総会など、さまざまな目的のために会話がなされるようになった。私たちはすっかり騒音に慣れている。ふと、ゆったりしたいと感じた時、誰もが足を放り出して座り、さらに騒がしいテレビやYoutubeの映像に興じるのだ。音は私たちの生活の一部として根つき、意識されることさえなくなったのである。

絶対的な静けさは、今や多くの人々に違和感を覚えさせ、恐怖やパニックさえも引き起こす。静寂の中では、人はそわそわとし、空間をお馴染みの騒音で満たすための道具を見つけ出そうとする。

忘れやすさ、音による抑圧、忙しさという要素も現代ならではのものだろう。チェコ作家のミラン・クンデラは、著書『緩やかさ』において、ゆとりと記憶や、せわしなさや忘却について、その密接な関係を主張している。私たちが生活している以上、常に五感は酷使されていて、自分自身の心の声に耳を傾けることなど必要とされない。

しかし、記憶や熟考なしに人生を先に進めることは不可能だ。新しい環境に飛び込んだり、そこに適応することはできない。音による抑圧から極力逃れることはできるかもしれないが、答えるためではなく問いかけるために内省することの大切さは揺るがない。私たちは深く思考し、自由に思いを巡らせるべきなのだ。しばらく自分の心の内側に対峙するためには、静けさが不可欠である。

そのような理由のために、現代において静けさが尊ばれ、思いに浸れる場所が求められているのではないだろうか。経済危機を経て、私たちはより大きなプレッシャーを感じるようになった。私たちはプレッシャーを感じながらも騒がしさを求め、胸に野望を抱きながらも経済的な不安を感じている。だからこそ時には立ち止まり、よく考える必要がある。経済危機はネガティブな感情も呼び起こすけれど、内省や熟考のきっかけにもなりうる。何が起こったのか。何か新しい手段はあるのか。こうして内省するには、静かなほうがいい。

2011年、ジョン・ガーズマとマイケル・ダントニオの念入りなリサーチから浮かび上がったのは“新しい消費者”と呼ばれるメタトレンドだった。経済危機を体験したことで、多くの人は生活習慣を改め、価値観を見直し、消費のスピードを控え、地元のものや身近にあるものを大切にようになった。

あなたが必要とする静けさは、誰かがもたらしてくれるものではない。自分で行動して、それを手に入れるしかないのだ。



“お米は陶器に似ている。
フォルムがとても美しいよね”

ハイメ・アジョン

La vuelta de Hayón

PHOTO KlunderBie

ラ・ブエルタ・デ・アジョン

輝く眼差しと超一流のプロフェッショナルリズムを備えた38歳のスペイン人、ハイメ・アジョンは家具やデザインの世界を魅了している。彼を深く知るために、バレンシアを訪ねた。

フリッツ・ハンセンのマーケティングマネージャーを務めるマリーエ・イーレマンは、サウンドエンジニアとカメラマンとともにスペイン第3の都市へと向かった。ハイメ・アジョンのミニフィルムを撮影するためだ。「彼のスタジオに着く前に、なぜ彼がこのバレンシアに拠点を持つことにしたのかという質問には、意味がないとわかりました。バレンシアという都市には、すべてが揃っていたからです。文化、壮大な建築、素晴らしい気候、ヤシやリンゴの木々、おいしいローカルフード、朝市、ビーチ。バレンシアは大きな街ですが、広々として活気があり、寛げるところなのです」

彼らを載せたタクシーは、ハイメのスタジオがある古びた美しい建物の間に止まった。ハイメは階段を走り降りてきて、デンマークからの小さな使節団をキスとハグで迎えてくれた。心のこもった歓迎を終えると、彼は「じゃあ後で」と言った。保育園に預けている20ヶ月の息子を、自転車で迎えに行くのだ。ハイメはゲスト

に格子つきのエレベーターを薦めたが、彼らは階段を歩いて上ことにした。「木彫りのパネルとモザイク柄の床のある階段の吹き抜けがとても見事で、ハイメのスタジオが最上階の6階にあると知っていても、すべてを見たいと思ったのです」とマリーエ・イーレマンは語る。

「ハイメのスタジオに入った時、私たちの目に入ったその光景は、想像をはるかに超えたすばらしいものでした。天井の高い部屋は、洗練されたディテール、スタッコ、背の高いパネル、モザイク模様の床、張出し窓、旧市街を眺める小さいベランダ、そしてすばらしい照明器具で埋め尽くされています。彼の仕事部屋はまるでリビングルームのようで、美しく個性的なインテリアでした。ファウンをはじめとするいくつかのソファと、ソファテーブル、カーペット、ランプ、そして張出し窓にはライティングデスク。ものがいっぱい詰まった棚は、クリエイティブな人々がほぼそうであるように、その散らかり方は雑然としていながらも考え抜かれているのです」

廊下を隔てた部屋には、ハイメの妻で写真家のニエンケ・クルンデルの仕事場があり、彼女も今回の仕事に欠かせない役目を果たしている。現在は二人目の子供を妊娠中だ。このアパートメントには、さらに2つの大きな部屋があり、3、4人のフタッフが作業する場所としてより事務所らしいインテリアで設えられている。

こちらからハイメ・アジョンをご覧ください。

fritzhanzen.com/ro-film



「ロンドン、バルセロナ、イタリアのトレヴィーゾにある各スタジオのスタッフとは、スカイプを使ってやり取りしているんだ」と保育園から戻ってきたハイメは説明する。そして、バレンシアにオフィスを開いたことで、仕事をする上でとても大切な“落ち着ける場所”を持たせたと話す。妻はこう付け加える。「ハイメは1年中、ほとんど旅をしています。けれども家にいる時は、ずっとそばにいてくれる理想的なパパです。こんなふうに振る舞える秘訣が何なのかわかりませんが」

新しい家を購入したばかりなのだ、ふたりはうれしそうに話す。バレンシアの中でも古い家々が立ち並ぶ通りにあり、現在はリノベーションの最中で、夏には家族で引っ越し予定だそうだ。

その日の夜、一行はふたたびハイメと会って、街中のレストランで一緒に食事をした。彼は出かけてくる前に、家族のために魚料理を作り終えてきたのだという。

“ハイメは1年中、ほとんど旅をしています。けれども家にいる時は、ずっとそばにいてくれる理想的なパパです。こんなふうに振る舞える秘訣が何なのかわかりませんが”

ニエンケ・クルンテル

時間が自由になる時は、料理を作るのは彼の役目だ。彼は料理好きで、米を使うメニューが得意だと話す。「お米は陶器に似ている。フォルムがとても美しいよね」

レストランはスタジオのすぐそばにあり、ハイメとオーナーは以前からの友人同士だ。すべての料理をオーダーしてくれたハイメは、何がこの店でベストなのかを正確に知っていた。彼の両親は、彼が子供の頃にマドリッドでレストランを経営していて、ハイメも料理の見栄えをよくしようと手伝っていたからかもしれない。彼はワインにも精通している。家には小さなブドウ畑を所有しており、自宅用にワインを醸造していたのだ。

午前1時に解散した時、ハイメから最後にかけられた言葉は、「デンマーク人は早起きしなくちゃ」だった。心まで温まるような多種多様なローカルフードが販売される朝市を、ぜひ経験すべきというのだ。

「ハイメ・アジョンの素顔を一言で表すなら、仕事とプライベートを別け隔てなく楽しみ、充実した人生を大切にしている人。多才だからこそとても忙しい彼ですが、それが人生の喜びをまったく損なっていないのです」マリーエ・イーレマンは、そう結論づけた。

Hayón – Facts

ハイメ・アジョンの真実

ハイメ・アジョンは、アートとデザインの境界線上で活動している。まるでペンでスケッチを描くように、彼は多彩な道具を使いこなす。では彼の具体的な仕事を見てみよう。



INTERIORS

カンパール、ファルベルジュ、Ocium Jewellery、リヤドロ、フローニンゲンミュージアム、Le Sergent Recruteur、ラ・テラサ・デル・カシノ

クウェートやスイスの宝石店、東京・バルセロナ・ロンドンのシューズショップ、ニューヨークの陶磁器メーカーやプロダクトブランド、オランダの美術館、パリやマドリッドのレストラン。ハイメ・アジョンはいつも休むことなく、世界を舞台に活躍しつづけている。そのインテリアデザインには、色彩とファンタジーがあふれ、なめらかな曲線が多用される。すべてを構成しているのはオーガニックなフォルムだ。

空間の印象はエレガントで、均整が取れ、伸び伸びしている。彼が好む素材は、メタリックなモザイクタイル、シルク、ペロアなどの重厚なテキスタイル。その繊細なテクスチャーに、コンクリートや木のラフな素材感を合わせる。彼は、高々とした天井と自由を愛している。

家具はそれぞれのプロジェクトのためのオートクチュールであることが多く、例外なく魅惑的なオブジェとして完成されている。ハイメはアートとデザインの架け橋となるものを日々追求し、昔ながらのサーカスのモチーフを頻りに用いる。彼の創造する世界の魅力は、おとぎ話の世界そのものだ。



DESIGN

カンパール、& Tradition、ラグ・カンパニー、au、ガイア・アンド・ジーノ、フリッツ・ハンセン、Orolog Watches、BDバルセロナデザイン、バカラ、メタルアルテ、リヤドロ、SE London、モーイ、Bernhardt design、ビザッツア

腕時計、携帯電話、家具、カーペット、テキスタイル、クリスタルガラス、陶磁器、ランプ、シューズ、バスルームコレクション。ハイメがデザインしてきたものは無数にあり、ジャンルも多岐にわたっているが、それぞれが彼の仕事であることは一目瞭然だ。彼は、自身の特徴的なデザインとそれぞれのクライアントのDNAを組み合わせる卓越した能力を身につけている。「相手の話にはしっかり耳を傾ける。最終的に、そのデザインが両者の個性を備え、互いに好きになるものでなければならないからね」とハイメは説明する。

彼のデザインは華やかだが、それはやけに気取った華やかさとは一線を画す。たとえばサーカスのピエロのモチーフのように、ユーモラスな要素がミックスされているからだろう。華美になりすぎないのは、そのためだ。個々のプロダクトはすみずみまで磨き上げられているが、ちょっと風変わりで、時にコミカルな雰囲気がある。トラディショナルな印象のデザインでも、生き生きとしていて、好奇心を刺激し、驚きを感じさせる。「すべてはデザインをより楽しく、より新鮮に、より深みのあるものにするための工夫です」その周囲にいる人すべてに、くつろぎを感じさせてくれるハイメのデザイン。何よりも確かなこと。それは、そこから目を離せない、ということだ。



AN

It has been 24 months in the making

EASY CHAIR

Fritz Hansen's new easy chair, named Ro™

IS

We have been following its creation

BORN

PHOTO *Ditte Isager*
STYLING *Christine Rudolph*

新しいラウンジチェアが生まれるまで

— 24ヶ月。「Ro™ (ロオ)」と名づけられた
フリッツ・ハンセンの新しいラウンジチェアが
生まれるまでに、それだけの時間が必要だった —

「事実、私たちのコレクションに、エッグチェアに匹敵するラウンジチェアがなかったともいえます」フリッツ・ハンセンで8年間を過ごし、この2年間はデザインチーフを務めるクリスチャン・グロセンは、そう説明する。「しかし新しいラウンジチェアに挑むには、少しためらいがありました。期待される要素がとて多く、その条件を満たしながら椅子をデザインしてくれる真のデザイナーをずっと見つけられなかったのです」。

ファウンが成功を取めたことで、フリッツ・ハンセンに迷いはなくなった。スペイン出身のトップデザイナーであるハイメ・アジンは、このブランドのDNAを完璧に理解して、長年の懸念だったテーマに取り組むことになった。24ヶ月前、彼はこのような説明を受けている。「私たちは、一人掛けの心地よい椅子が欲しいのです」と。その椅子はファウンとコーディネートできなければならな





ハイメ・アジソンは、ロオの脚をハイヒールのようにシャープにしたいと考えた。しかし床に踏がつく可能性を考慮して、最終的なフォルムを調整した。素材はマットなアルミニウムだ。

いが、単に一人掛けのファウンというわけではない。

約2年前へと時間を遡ってみよう。このプロジェクトに着手するため、ハイメ・アジソンはデンマークを訪れた。携えていたのは、フィアンセとも噂される大切なスケッチブックと大きなペンケース。スケッチブックには、新しいラウンジチェアのアイディアが無数に描かれていた。クリスチャン・グロセンと、フリッツ・ハンセンのモデル製作者でプロトタイプ開発者のミケル・ヘルマー・ラーセンが同席して、最初のミーティングが行われた。やがて3人は、アレロッドのフリッツ・ハンセン社屋の最も神聖な空間へと移動した。家具工房である。3人の中で誰がスペイン人デザイナーなのかは一目瞭然だった。ハイメ・アジソンの外見がいかに地中海系だからというだけでなく、鮮やかなグリーンの彼の靴が目をついたからだ。

「最初は、針金を曲げて伸縮性のあるガーゼを被せ、ごくシンプルなスケールモデルを作りました。ハイメが描いたいくつかのスケッチをベースにしたものです。椅子の特徴が見えてきた時点で、原寸大のざっくりとしたモデルを作ります。発泡スチロールの塊をノコギリでカットし、削っていくのです。いいと思えるフォルムが見つかるまで、彫刻家のような作業を続けていきました」と、ミケル・ヘルマー・ラーセンは当時を思い出す。工房で数日間を過ごした後、ハイメ・アジソンはバレンシアに帰り、ミケル・ヘルマーは引き続きモデルの完成度を高めていった。次いで発泡スチロールの表面を石膏で型取りして、準備が整った後でハイメをふたたびデンマークに呼んだ。その時点からモデルは、どこか人間のような姿をしていた。3人は、椅子の肩、腰、首について検討を重ねた。また、このフォルムは別のオブジェとの関連性を思い起こさせるものでもあった。椅子の背面をある角度から見ると、シルエットがギリシャ風のアンティークの壺にそっくりなのだ。まるで仕立屋の作業場のように、細かな修正が加えられていった。だんだんと完成が近づくと、フォルムはCAD作業によってデータ化されていく。「すべての作業は、ファウンに比べて早く進みました。もうお互いを知り尽くしていたからかもしれません」とクリスチャン・グロセン。それでも満足いくものができあがるまでに6、7点のプロトタイプが制作された。

「私たちは椅子のフォルムを念入りに検討しました。きわめて心地よく、きわめて美しいものでなければならなかったからです。大型で丸々と太った椅子は、座り心地はいいかもしれませんが、美しくありません。ほっそりとしてエレガントな椅子をデザインしたかったのです。それが私たちにとっての大きな課題でした」とハイメ・アジソンは語る。彼とミケル・ヘルマーは、椅子の脚部のフォルムについて



“私たちは椅子のフェルムを念入りに検討しました。
きわめて心地よく、きわめて美しいものでなければ
ならなかったからです”

ハイメ・アジョン





も議論した。素材はマットなアルミニウムだ。ハイメは、ハイヒールのように細くシャープな脚にしたいと考えていた。当初その考えは、グロセンとヘルマーの経験と相容れなかった。椅子の脚が細すぎると、床に跡が残ることがあり、使い手が満足しないのだ。ちょうどいい太さになるように、2人はハイメと意見交換した。「彼はレスポンスが早い。一緒に働いていて気持ちいいんです」。

フォルムの完成形が見えてきた時点で、開発チームは張り地について詰めていった。製造工程において、張り地の加工が難しいであろうことはすぐにわかった。「張り地はドレスのように縫わなくてはならず、椅子の隅々まで隙間なく生地をフィットさせるためには一気に素早く縫製作業をしなければなりません。ドレスを縫ったら、裏返してから椅子に被せます。そして1ミリ単位で本体に合わせて接着していきます。椅子のシルエットの細い部分（首）では生地が余り、逆に幅広い部分（肩）は生地を引っ張って伸ばすので、さまざまなテクニックが必要です。この作業ができる職人は工場に一人だけ。これから何人かが、この技を身につけることになります」とクリスチャン・グロセンは語る。椅子のフォルムが張り地の作業に多くを求める上に、この椅子の張り地の条件を満たす生地はごく限られている。ほどよい伸縮性が不可欠で、柄のある生地は適さない。椅子のデザインをより生き生きとしたユニークなものにするために、ハイメはそれぞれの椅子に、同系色の2種類のテクスチャーを持つ生地を用いることにした。座面のシェルに1種類、内部のクッションにもう1種類である。話し合いを経て、この椅子は9色のカラーバリエーションで展開されることになった。オーセンティックな3色（ブラック、グレー、ベージュ）、華やかな3色（パープル、ブルー、イエロー）、そして落ちついた3色（ローズ、セージ、サンド）である。ただしすべての色合いには、グレーのニュアンスが含まれている。「これは意識的なセレクトです。こうすることで、この椅子を既存のインテリアに違和感なく取り入れることができます。より落ち着きが生まれるのです。そしてグレーのニュアンスは、椅子が美しく年月を重ねるためにも効果的です」ハイメは、そのように説明してくれた。

いよいよ完成が近づき、椅子に名前をつける段階になった。最終的に選ばれたのは「Ro™（ロオ）」。デンマーク語で「落ち着き」「静けさ」「休息」を意味する言葉だ。「この椅子は思索的で、ある種の瞑想に人を誘うものだと考えました」とクリスチャン・グロセン。「結局、これに代わる言葉はありませんでした」。「ロオ」がファウンどどのような関係にあるのかを質問すると、ハイメ・アジソンは答えた。「いとこのようなものですね」



ロオには9色のカラーバリエーションがある。オーセンティックな3色（ブラック、グレー、ベージュ）、華やかな3色（パープル、ブルー、イエロー）、そして落ちついた3色（ローズ、セージ、サンド）である。デザインをさらに生き生きとさせるため、ハイメは色ごとに質感の違う2つの生地を選び、シェルと内側クッションの印象に変化を与えている。

“この椅子に「Ro™ (ロオ)」と名づけました。
思索的で、ある種の瞑想に人を誘うものだと考えたのです”
クリスチャン・グロセン





PHOTO
Ulrik Janzen, BIG&Glessner, Jakob Boserup

URBAN OASES

TEXT
Katrine Martensen-Larsen

都会のオアシス

彼らの頭脳は柔軟で、すべてを逆から考える。問題や困難に直面すると、彼らはそれをチャンスだと思う。彼らの発想は伝統に反するが、必ず結果を出す。ビャーケ・インゲルスが率いる建築事務所「BIG」で、私は才能あふれる若い建築家に話を聞いた。このオフィスのモットーは「Yes is More」だ。彼らは一貫してアーティスティックで、コンテンポラリーで、やがて建築界で議論を呼ぶテーマやトレンドをリードする存在だと広く認められている。

活気を失った街、混沌としたインフラ、気候変動、世界的な都市化。BIGはこうした大きなテーマや課題を建築的に解決しようと取り組み、挑戦を続けている。

「私たちのミッションは、人々が暮らす街の生活をおもしろくするために、徹底的にがんばることです」と、パートナーのヤコブ・ランゲは語る。BIGは、最近、バルビュという名の雑然とした工業地域に移転してきた。その空間は騒がしく、いたるところに大胆に曲がりくねった建築模型がある。レゴブロック、発泡スチロール、ダンボール製の建物などが並び、どれひとつとして建築らしい形をしていない。緑の斑点や青い水たまりなど、どちらかという生き物のフォルムを思わせるものも多い。

デンマークにおいてBIGは、住宅街「Bjerget」、ウアスタズの「8-tallet」、世界最高のプロジェクトとも称賛されているネアプロの都市施設「Superkilen」などを手がけている。だが何より彼らを世界的に有名にしたのは、2010年の北京万博で本物の人魚姫の像を展示するという突拍子もないアイデアだった。BIGはこの万博のデンマーク館のコンペを勝ち取り、「福祉」と「おとぎ話」をかけて「Welfairytales」という独創的な名前をつけた。

このプロジェクトは、フォート・ローダーデールのウォーターフロントにある再開発地区を活用し、既存のプロムナードと川沿いに新たに作った公園を繋いで人の流れを作る。

最近では、アマーに完成する新しいゴミ焼却場の設計で賞を受けた。全長1500メートルの人工スキー場が併設され、1本の煙突が煙のリングを作るというプロジェクトだ。焼却場の既存概念を打ち破るアイデアだが、クライアントや焼却場を共同所有するコペンハーゲンの自治体らが、画期的にして勇氣ある選択をしたのだ。ではビャーク・インゲルスは、何を考えていたのか。今、彼は一時的にニューヨークに移っている。マンハッタンで超高層ビルや、フロリダの住宅群のプロジェクトで大忙しなのだ。

「ニューヨークは、緑あふれる生き生きとした街へと急速に変貌を遂げつつあります。ハドソン川のウォーターフロントのリノベーション、古い線路跡に作られた緑の公園ハイライン、百万本の木々からなる植栽、ブロードウェイの歩行者用モール、何キロにも及ぶ自転車専用レーンの設置。どのプロジェクトも、都市がオアシス化している証拠と言えます。私たちは、ウエスト57丁目から、住宅街がひしめく都市の心臓部まで、この変貌を継続させようと試みているのです」と、ビャーク・インゲルスは述べている。

集合住宅と高層ビルのハイブリッド

この建物は確実に、ニューヨーカーの首を痛くするだろう。このプロジェクトでは、ヨーロッパの伝統的な集合住宅と、マンハッタンに典型的な高層ビルがミックスされる。住民にくつろぎや交流をもたらす中

庭が建物の中腹にあり、洗練された広大な景観を作り出す高層ビルが一角を占める。建物の3つのコーナーは低く保たれ、北東の一角だけを高さ142メートルにすることで、中庭越しにハドソン川の眺めが広がり、夕陽が建物の奥まで差し込むフォルムになった。住民たちにとって憩いの場が生まれる。

リバーサイドの生活

ニューヨークからはるかに南に下ったフロリダで、BIGはさらに大きなプロジェクトにかかわっている。フォート・ローダーデールのニューリバー沿いの再開発地区に、1000戸の賃貸住宅、1000平方メートルのレストラン、その倍の面積の店舗施設を作り、活気にあふれる魅力的な住宅地へと発展させるのだ。南へ向かう公共のプロムナードは、2つの住居タワーの境界線となり、リバーサイドの生活の起点となるとともに、既存の港を保存する役目を果たす。住居タワーの間には誰もが利用できる広場が生まれ、生活の場を水面の近くまで広げる。

「このプロジェクトは、市街中心部のウォーターフロントの空白地域を埋め、既存のプロムナードを新しく再生した川沿いの公園と繋げます。自然の力を生かして、美しい環境に穏やかさと活力を備えさせるのです。2つのタワーは、境目と空間を作るために引き裂かれたようなフォルムになります。ここが川に面したエリアへの入口。足し算ではなく、引き算から生まれたデザインです」とビャーク・インゲルスは説明している。

インゲルスが言う「引き算」が正確には何を意味しているのかをヤコブ・ランゲに質問すると、彼はためらうことなく1枚のキッチンペーパーを手にとってクシャクシャにした。そして真ん中に穴をあけた。「見てください。マイナスすることで、新しさやおもしろさが得られるんです。この穴が創造に役立ちます」それから彼は自分のコーヒーカップをテーブルの真ん中に置き、こう続けた。

「単体の建物には相対するものがありません。しかし、すぐ近くにもうひとつの建物を置くと（ここで彼は私のカップを横に移動した）、ふたつの間に空間が生まれます。私たちが何かを使うことのできる空間です。周囲に住む人々の生活をより美しく、よりよくする都市のオアシスを、私たちはこの場所に作りたいのです」

BIG

BIG (Bjarke Ingels Group) は建築家、デザイナー、そして設計、都市学、研究開発などの各分野のエキスパートからなる集団である。彼らの計画や技術は革新的であり、費用対効果に優れ、また省資源においても定評がある。2011年には権威ある「ウォールストリートジャーナル」のイノベーターアワードを受賞。オフィスには170名のスタッフがおり、うち110人はコペンハーゲン、60人はニューヨークに在籍。
big.dk



「私たちのミッションは、人々が暮らす街の生活をおもしろくするために、徹底的にがんばることです」



ウアスタズ（コペンハーゲン）の「Bjerget」は、敷地の3分の2を駐車場ビル、3分の1を住居にするという既存の開発計画から発想された。BIGは、将来の住民が駐車場ビルを見ながら生活するのは好ましくないと考え、駐車場に要するスペースを、住居の高層化のための土台にすることにした。建築における錬金術だ。



AGEING WITH BEAUTY

TEXT Henrik Engstrøm
PHOTO Ole Konstantyner

美しく年月を重ねるには

近年、インテリア製品のデザインでは、木がふたたび多く使われるようになってきた。合板を素材とするフリッツ・ハンセン製品に9種類もの木材のバリエーションがあるのも、驚くべきことではない。木の大きな魅力は独特の質感であり、時間や、摩耗や、手入れによって生まれる独特の光沢である。フリッツ・ハンセンにとって、質感は高いクオリティに欠かせない構成要素だ。ヴィンテージものの椅子やテーブルにおいては、職人の技術の高さがそこに表れる。合板を使った最高級の木工家具としての完璧さを追求する姿勢は、献身的とも言えるレベルである。

合板の素材となる薄い板は、表面の層と内側の層とで異なる。たとえばセブンチェアのシリーズでは、成型合板は9つの層で構成されている。内側の層で使われるのはビーチ材で、強度を高めるために木目の向きが互い違いに接着されている。表面の層はバリエーションが豊富にあり、個別に扱われる。まず表面の層の薄い板がパネル状にカットされる。多くの仕上げでは、木目が左右対称になるように、1枚ごとに左右の向きを変えて接着されていく。いっそうの強度を与えるため、表面の板の裏側にはインド綿が挟み込んである。合板は立体的に成形され、何度も磨かれて、いくつかのプロセスを経ながら塗装を施す。フリッツ・ハンセンの製造工場は非常に近代的だが、その印象を裏切るほどに、職人の手作業が欠かせない。いずれの木の椅子も、少なくとも計22工程が彼らの手によってなされる。つまりすべての椅子は、人の目によって何度も不具合がチェックされ、確認されるということだ。ただし資材を購入する部門のスタッフの経験や知識のおかげで、製品のクオリティを落とすような素材は、まず工場に持ち込まれることがない。

フリッツ・ハンセンは、家具づくりのために最上質の木材を選ぶプロセスを重視している。長年の付き合いがある木材業者は、フリッツ・ハンセンが目指すクオリティをよく理解していて、入手可能な合板の原料のうち上位5~10%のものだけを提供してくれる。木のクオリティに妥協せず投資を惜しまないのは、合理的な判断でもある。工場で製造した椅子が、素材のクオリティが低いという理由で不良品になったら、それは大いなる時間の無駄なのだ。可能な限り上質な木を用いることにより、長く使えば使うほど美しい質感に変化する、長持ちする椅子を作るため、完璧さの追求はいつまでも終わることがない。

A NEW KAISER HAS BEEN BORN

New KAISER idell™ table lamp in matt black
designed by Christian Dell
produced by Fritz Hansen



See the entire collection of the iconic KAISER idell™
Bauhaus lamps at fritzhanzen.com/kaiseridell

REPUBLIC OF **Fritz Hansen**®

We like.



Photo: Lior Zilberstein

「1105」では、トラディショナルなカクテルで3度もデンマークのチャンピオンに輝いたバーテンダー、ハーディープ・リハールがカウンターに立っている。「インスピレーションを受けたものがあるとすれば、心地よさ、洗練、格式を兼ね備えたイギリスのホテルのバーだね」とオーナーのモーテン・ドラストロフ。オープン1年後には、コンテナストのホットリストに掲載された実績がある。「1105」という名前は、バーのあるコペンハーゲン中心地の郵便番号から。www.1105.dk

ストックホルムの中心部にある「Ett Hem」は、特別な体験ができるホテル。ゲストは家族の友人のようにもてなされる。リビングでテレビを観たり、本棚の本を眺めたり。ホテルのクルマを借りることも、犬を散歩に連れていくこともできる。古いタウンハウスを改修した、まるで自宅のようなホテルなのだ。インテリアデザインを担当したイルス・クロフォードの個性が光る。www.ettthemstockholm.se



Photo: Magnus Marling



Photo: Stuart McIntyre



Photo: Yves Saint Laurent, Rue Aubriot, Paris, 1973 © Helmut Newton Estate

ストックホルムの写真美術館のコレクションは、世界最大級だ。今年は3月9日から5月26日までアンリ・カルティエ＝ブレッソンの、5月31日から9月29日までヘルムート・ニュートンの充実した回顧展が予定されている。www.fotografiska.eu

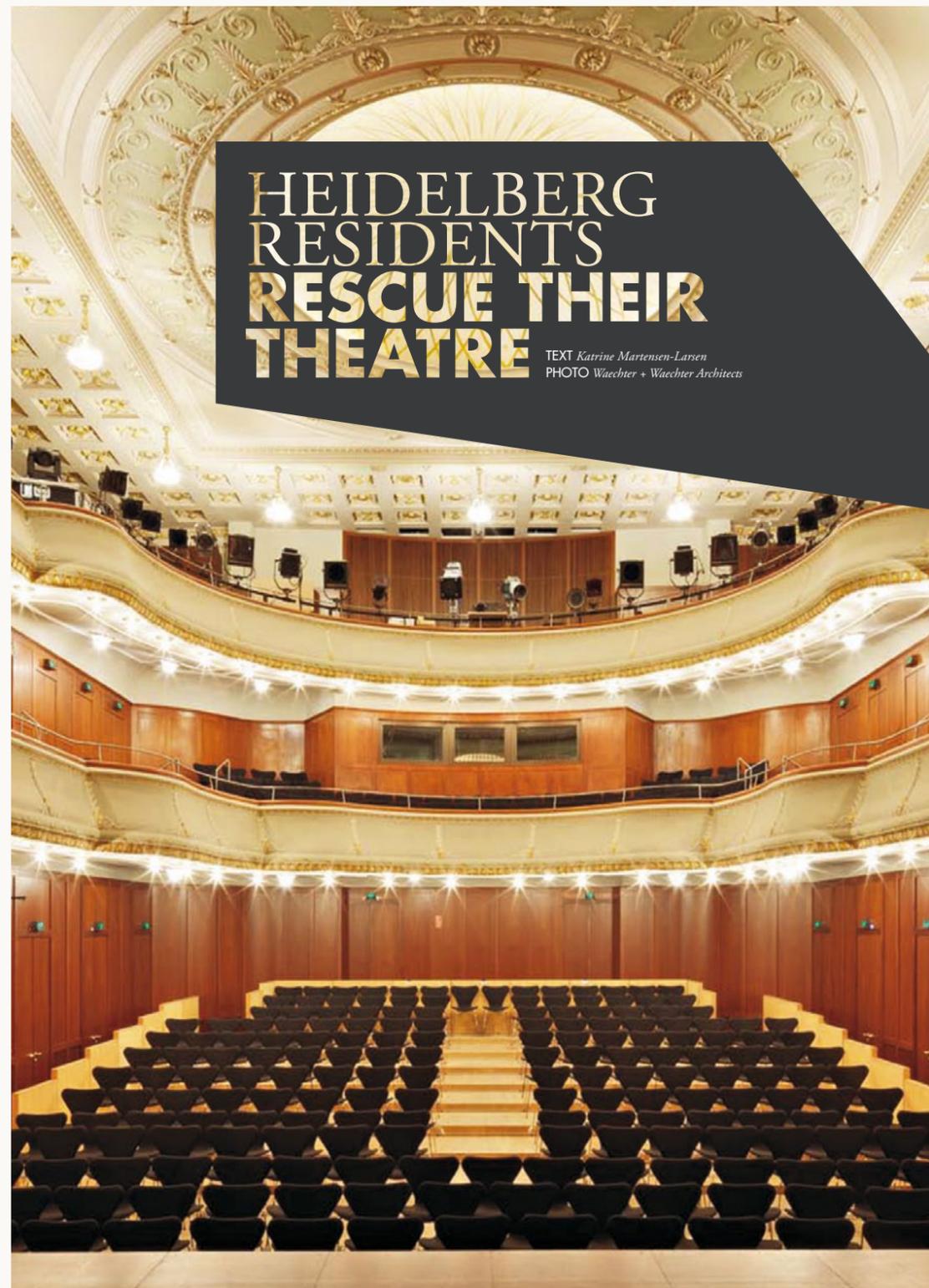
Dessauのパウハウス校舎の階段には、ブルー、イエロー、グレー、オレンジといった色が用いられている。1925年、この地に校舎が完成した当時は、この色彩感覚はきわめて大胆不敵だった。ここで学生は、画家のパウル・クレーらに色彩学を学んだ。



Photo: Katrine Martensen-Larsen



ノルウェー人作家、カール・オーヴェ・クナウスゴールが発表した自伝的小説は、その内容もすばらしいが、全6冊4000ページというボリュームも圧巻。ぜひ一気に読んでみてほしい。「Min Kamp」(私の戦い)は多くの国で翻訳され、特にアメリカでは各書評で絶賛されている。



HEIDELBERG RESIDENTS RESCUE THEIR THEATRE

TEXT Katrine Martensen-Larsen
PHOTO Waechter + Waechter Architects

「セブンチェアデザインのモダンさが、歴史が刻まれた空間とコントラストをつくり出すとともに、椅子の曲線と空間の雰囲気美しく調和しています」と、建築家フェリクス・ヴェクターは説明する。

ハイデルベルクが守った劇場

その美しくもかなり古びた市民劇場は、安全上の理由によって2006年に閉鎖を余儀なくされ、将来の見通しがまったく立たない状態だった。しかし、それから6年が経ち、町の住民たちの協力でふたたび活気を取り戻す。今、ドイツのハイデルベルク歌劇場では、連日のようにダンス、演奏、歌、劇が行われている。

160歳を迎えたこの劇場は、長年にわたって“枠組み”を突き破ってきた。オペラ、コンサート、ダンス、子供劇などが行われるたびに、スペース不足に悩まされ、近隣の建物を使って拡張されてきたのだ。やがて劇場は、歴史あるハイデルベルクの市街地の中心部の一区画をすべて占領してしまった。同時に建物の老朽化も進み、安全上の承認が受けられなくなった。もちろん建築面の安全性は満たされなくてはならないが、劇場の機能がいくつかのロケーションに分かれてしまうのが不便なのも確かだった。すべての施設をひとつの屋根の下に集めたいと劇場側が強く望んだことには、十分に納得できる。

町の文化の拠点として

「劇場を甦らせることができたのは、地元の町議会が始めた『私たちの劇場を守ろう』というキャンペーンによって、全予算6000万ユーロの約3分の1が集まったからです。自分たちの文化の拠点となる場所を守りたいという住民は多く、3000人以上もの賛同者、企業家、住民らから寄付金が寄せられました。5ユーロを寄付した若い男子学生から、ひとりで1650万ユーロもの献金をした音楽家のウォルフガング・マルゲールまで、さまざまな人々がいました」と、劇場支配人のホルガー・シュルツェは語る。

劇場を復活させる作業は2009年にスタートした。保存されていた建物の内部で工事が行われ、約3年間にわたって街の景観の中に巨大なクレーンのシルエットがあった。すべてのホール、作業場、更衣室、レストランなどがひとつの建物として統合された上に、新たな劇場ホールが加えられ、吹き抜け部分にロビーが増築された。光、空間、設えが一体になった壮大な建築には、優美な黒いスワンチェアが象徴的に置かれている。「スワンチェアは、あまりに厳格な印象をもたらしかねないこの建築に、心地よい軽やかさを与えてくれました」と、このプロジェクトを手がけた建築事務所 Waechter + Waechter のフェリクス・ヴェクターは説明する。

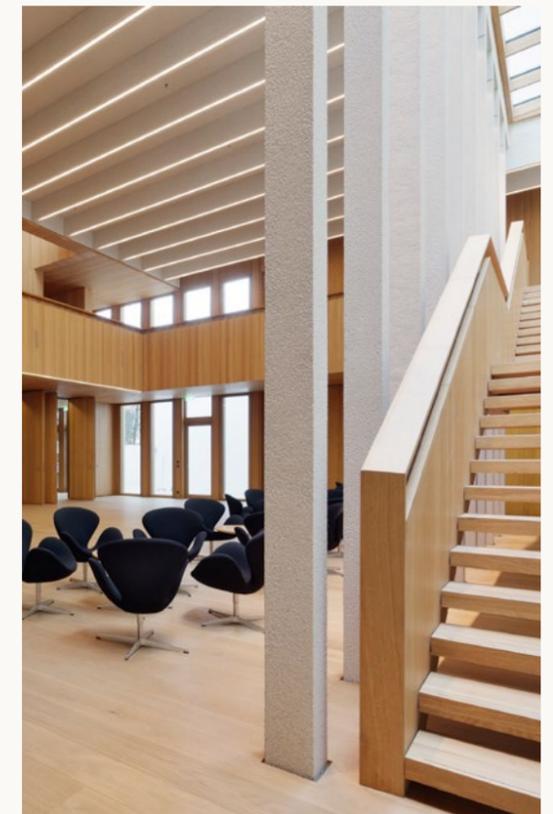
今回の一大プロジェクトに関連して、長く受け継がれてきた古いステージも丁寧に改修された。ここでフェリクス・ヴェクターは、観客が座る椅子として、黒いファブリック張りのセブンチェアを選んだ。「セブンチェアのデザインのモダンさが、歴史が刻まれた空間とコントラストをつくり出すとともに、椅子の曲線と空間の雰囲気が美しくフィットしています」と彼は語る。

現代と歴史の融合

2012年の年末、ハイデルベルク歌劇場のドアはふたたび開かれた。初日には14000人以上の人々が訪れ、大規模に改修された建物と新しいホールやロビーを目の当たりにして、感嘆の声をあげた。そして町の住民たちは、建築家が成し遂げた現代と歴史の融合に感謝した。

詳細は：theaterheidelberg.de

壮大な新しいロビーには、黒い張り地のアルネ・ヤコブセンの
スワンチェアが24脚置かれ、ともすると厳格な印象を
与えかねない建築に、心地よい軽やかさをもたらしている。



JAMIE OLIVER AND THE BIG CHAIR PROJECT

PHOTO David Loftus



ジェイミー・オリヴァーは世界中の人々に、ほんのわずかでも上質な素材があれば、素晴らしい料理が作れるということを教えてくれた。簡単に言うなら、それは家具をデザインして製品化するのと同じレシピである。おいしい料理とすぐれたデザインが密接に関係していることは、疑う余地がない。素敵な食事を楽しむ時に、使い心地のいい椅子に座りたくないという人はいないだろう。すべてに愛情と熱意をこめて作ることが大切なのだ。



ジェイミー・オリヴァーと ビッグ・チェア・プロジェクト

話は2010年に遡る。ジェイミー・オリヴァーがロンドンでフィフティーンという名前の独創的なレストラングループを始めた時、彼は顧客のための最高の椅子を求めてフリッツ・ハンセンにコンタクトしてきた。これが私たちの出会いだった。この時の彼のアイデアは、料理というマジックによって、若い世代により充実した将来を築くチャンスを与えることで、自身がかかわるベターフード基金の活動の一環だった。教育を目的に2002年に設立されたこの基金は、さまざまな料理に関する人々をサポートし、クオリティの高い食事が広まることを意図してきた。それから10年間、そのプログラムによって、数百人もの失業していた若者が、プロのシェフとして自立を果たした。2012年に10周年を迎えたプロジェクトについて、今後10年の活動資金の調達を視野に入れ、オリヴァーはちょっとしたお祝いをしようと考えた。ビッグ・チェア・プロジェクトは、こうして始まった。

WE HAD A TALK WITH JAMIE OLIVER ABOUT THE PROJECT

ビッグ・チェア・プロジェクトを始めたきっかけは何ですか？

そうですね、フリッツ・ハンセンは何年にもわたって素晴らしい椅子をフィフティーンに提供してくれています。だからオフィスのメンバーのアンジェラが、デザイン界や

ファッション界の友人たちにユニークな椅子をデザインしてもらい、ベターフード基金のためのオークションをやるかと提案した時に、すぐにフリッツ・ハンセンに話を持ちかけたのです。これはシンプルながら見事なアイデアで、うれしくなった私はクリエイティブな気持ちで1、2点の椅子をデザインしました。10脚でスタートした企画は、すぐに20脚になりました。サー・クエンティン・ブレイク、サー・ポール・スミス、サラ・パートン、クリストファー・ベイリー、トレイシー・エミン、ジョナサン・ヨーといった錚々たるクリエイターが参加してくれたのは、とてもラッキーだったと思います。

あなたはオークションで販売するために特別なエッグチェアをデザインしましたが、この椅子をどう思いますか？なぜエッグチェアは、家具のアイコンになったのでしょうか？

フリッツ・ハンセンの椅子の多くがアイコンで、彼らが作るの美しい家具そのものだと思います。中でもエッグチェアは、この半世紀のデザインの歴史を通じて、卓越した地位にあります。デザインにちょっとでも関心がある人なら、エッグチェアを知っているでしょう。すべての椅子は手縫いで、私は自分が持っているエッグチェアの張り地を縫ったハンズに会ったこともあります。この椅子には多くの愛情が注がれていて、一生を通じて使いつづけることができます。

あなたがデザインしたエッグチェア「フルーツ・スフレ」のアイデアは、どうやって思いついたのですか？

言うまでもなく、どうにかして食べ物を結びつけたかったので、季節のフルーツをたくさん使ったプリント柄にしようと考えました。私はすぐれたアーティストだとはとて言えませんが、学校でアートを習

い、まあまあそこそこのものは作っていました。時間をかけること、いい仕事をするように気をつけることがポイントでした。エッグとスフレという言葉遊びに気づいてもらえたらうれしいのですが。

そのエッグチェアは、どこへ行ったかわかりますか？

マシュー・フロイトが購入したと思います。彼に感謝しなければなりません。さらにこの多くの敬意を表すべき意志ある方々が、椅子を買って上げてくれました。素敵なお口レーヌ・パスカル、私の大切な友人で俳優のジェイソン・フレミングたちです。

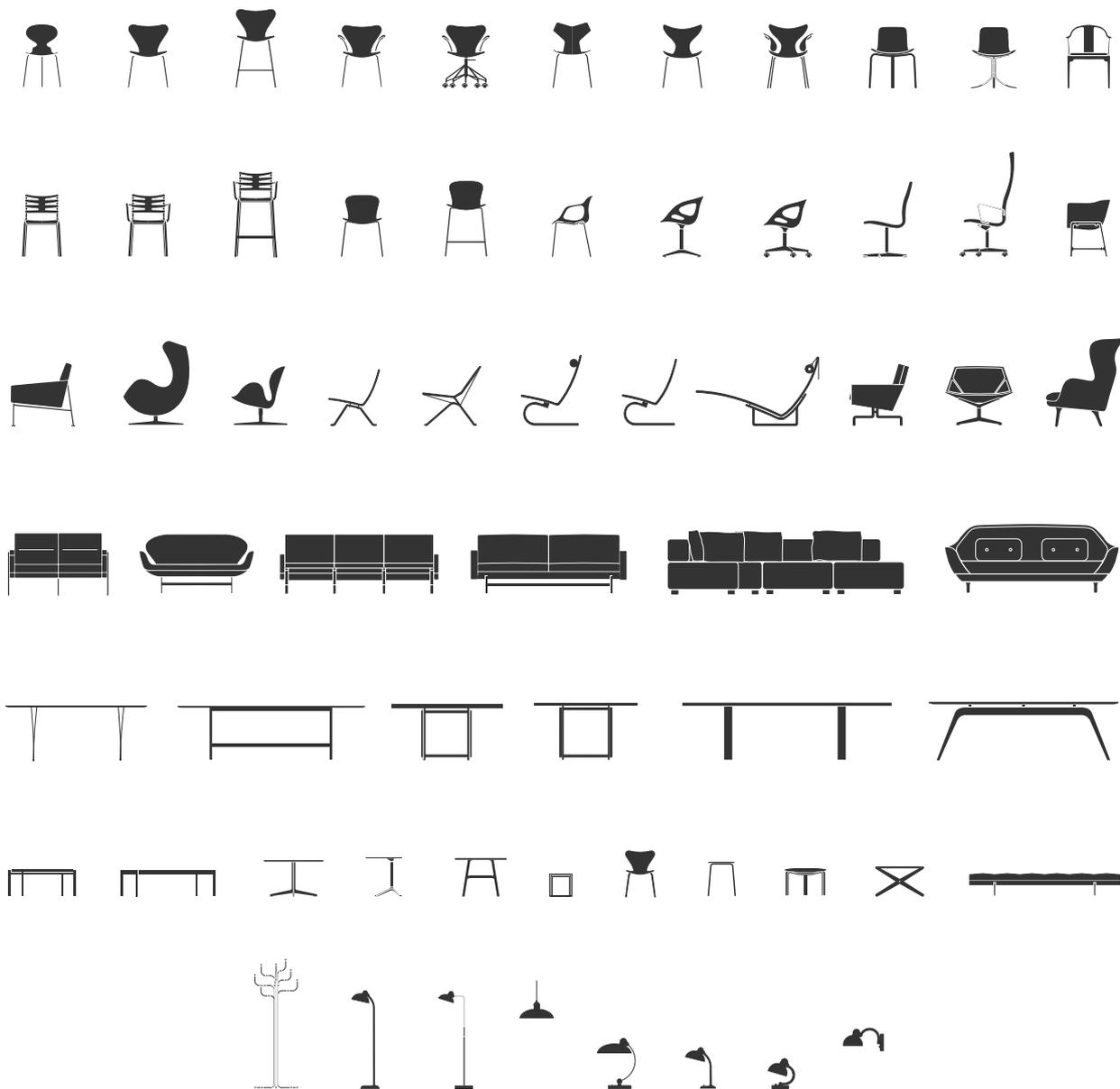
オークションの収益は、何に使われるのですか？

集まったお金は、ベターフード基金が活用します。特に、夢や目標を持たない若者たちを受け入れ、ケータリングの経験を積んでもらい、私たちが誇りに思えるほどのシェフへと変身させているロンドンのレストラン、フィフティーンへの支援に充てられます。

The Better Food Foundation

ベターフード基金は、若者たちがフード業界で活躍できるように教育し、力づけ、刺激を与え、よりよい食環境を作り出せるように活動している。「私たちが暮らす地球には、太り過ぎ、または肥満とされる人々が1億人以上います。食育は、この問題を解決するために最も有意義だと私は信じています。食や料理について十分な知識があれば、たとえ金銭的に貧しくても、より健康で幸福な生活を送ることができます。しかし知識がなければ、塩、砂糖、油をたっぷり使ったファストフードや調理済みの食事しか食べる気にならないでしょう。そんな食事を毎日続けていたら、最悪の結末が待っています」とジェイミー・オリヴァーは説明する。

ビッグ・チェア・プロジェクトは、合計56000ポンドの収益を生んだ。ジェイミー・オリヴァーがデザインしたエッグチェアは10000ポンドで購入されている。このエッグチェアのほか、20脚のアリンコチェアがオークションで落札されるか、または賞品として贈られている。



MY REPUBLIC®

お手持ちの製品を My republic にご登録いただくと、保証の延長など、様々な特典がご利用いただけます。
オンライン登録、保証の延長、特典の詳細に関しては下記のURLをご覧ください。

To see more and register, go to fritzhanzen.com/my-republic